



ひつじぎ
羊崎 ミサキ / 著
みず ため とり
水溜鳥 / イラスト

目次

まえがき	004
1話 謎の着物女子と本ぎらいのミサキ	005
2話 あやかし図書委員会へようこそ！	014
3話 ついてきた猫又と、不穏なカゲ	028
4話 紙魚、襲来！	038
5話 仲なおりのブックレビュー	048
6話 ミサキの決意と九尾のキツネ	057
7話 図書委員のお仕事	067
8話 図書委員長のカレと、あやかしのこと	079
9話 おおきく息を吸って	091
10話 ふたたびの紙魚……でも負けない！	100

11話 座敷童の恋

12話 大人と猫

13話 あたしが読み聞かせ？なんて？

14話 まだ読んでいないたくさんの本たち

15話 トラブル発生！ お話をにつけなきや！

16話 お話会と、恋のライバル……？

17話 ただのケンカじゃない

18話 あやかし大集合

19話 キズナ

20話 腹心の友

21話 あやかし図書委員会

あとがき

109

119

125

137

148

155

164

176

186

194

208

221

まえがき

あたしがいまから話すのは、あやかしの物語。

あやかし、つまりオバケなんて、いるわけないって？

たくさんのひとがそう思ってる。だってあやかしは目に見えないから。

でも見えないってことは、いないってことじゃない。

あたしの友だちになってくれたあやかしは、すこしこわくて秘密をもってて、やさしかった。

ずっとむかし、物語は小説家が書くものじゃなかった。

たき火をかこんで、だれかが話しはじめる、ワクワクするような冒険の話とか、しあわせな気持ちになるような恋の話。それが物語のはじまりだ。だれが話したっていい。

だからあたしも、あなたに聞いてほしい。

本ぎらいだったあたしを変えた、あたしの大切な、目に見えない友だちの物語を。

1 話

謎の着物女子と本ぎらいのミサキ

帰りの会がはじまった教室は、まだちよつとだけ、変なおいがしている。

給食の時間に、牛乳をこぼしたコがいたからだ。

夏休みはおわつたんだから休みボケしてちやダメだとか、先生のつまらない話がつづいている。

はやく教室から出たくつて、あたしは、ろうかがわの窓をなんとなくがめた。

え？

あたしは目をうたがった。

だれかが、ろうかに立って、窓ごしにこつちを見ていたんだ。

背はちいさめで、ふわふわしたショートボブで、なぜか着物を着ている女のこ。

なんで着物なの、と思つて、あたしはまじまじとそのコを見つめた。

おない年くらいに見えるそのコは、前髪を真っ赤なヘアピンでとめていて、人形みたいに白い

顔をしていて、

……あたしと、目があった。

3階の窓から地面をのぞきこんだときみたい
に、背中がぞくつとした。

——まってるよ。

そんな声を、聞いたような気がした。

「……ざき。羊崎ミサキ！」

「っはい！」

いきなり名前をよばれて、あたしはあわてて
返事して、前にむきなおった。

いつも青いジャージの、担任の青山先生が、

「しかたのないやつだ」と言わんばかりの顔で
あたしを見ている。

「いまだれかろうかにいて……」

あたしはそう言っつて、ろうかを指さした。

「だれもいないだろ」

「えっ!？」



びつくりだ。もういちどろうかを見たら、あの着物女子はいなくなっていた。

ひよつとして夢だったの……かな。

「あんまりぼーつとするんじゃない」

あきれたような声で青山先生に注意された。

いまクスクスわらったのは、あたしがきらいな男子の、本村くん。

あーあ。

やっちゃったぜ。

「で、羊崎。お前の読書感想文、書きなおしな」

「えっ!？」

青山先生はつづけて、ゼツポー的なことを言った。いつもジャージのくせに、なんてエラそう

なんだろう。

「え、じゃない。なんなんだこの、文字が消えてて読めませんでした、って感想は」

「でもでも、ほんとなんです」

夏休みには、読書感想文の宿題が出た。

あたしにとってはいちばんの強敵だ。

ほんとにめんどくさいと思つたあたしは、図書室で超テキストに本をえらんだ。だけどかりた本は、途中からぜんぶ、白いページばかりがつづいていたんだ。ラッキーと思つたあたしは、ありのまま感想文に書いて提出したんだけど。

「うそはいかん」

青山先生は、あたしの言うことなんか、聞こうとしない。

「司書の先生も心配してたぞ。とくべつに、羊崎に感想文の書きかたを教えてくれるそうだ」

「……げっ」

あたしはちいさく、うめき声をあげた。

「げ、じゃない。今日のほうかごは、図書室にある図書準備室に行きなさい」

「……はい」とあたしがつぶやくと、先生は満足げにうなずいた。

やがて帰りの会がおわつて、日直のコが号令をかけた。

——きりーつ、先生さようなら。——さよーならー。——はい、さようなら。

そしてわいわいと話し声がひびき、教室のなかは、学校がおわつた解放感でいっぱいになってゆく。

しょんぼりとうつむく、あたしをのぞいて。

「きーのーどーくー」

うしろから声をかけてきたのは、保育園のときからの友だち、吉岡ひかりだった。

あだ名は、オカピ。

オカピはあたしの机にもたれかかるように手をおいた。

そのツメには、学校で禁止されているネイル

シールが、すでに貼られている。

「なんであいつあんなウエメセなのかな」

オカピがよく言うウエメセ、っていうのは

「上から目線」のことだ。

「キャラつくってるしね」

あたしもまけじと、青山先生のわるくちを言

った。

名字が青山で、いつも青いジャージを着てる

なんて、キャラつくってると思えない。

「なー、やばいよあれ」



そしてオカピは、つづけて不思議そうに聞いてきた。

「でもなんでミサキつてば、すぐバレるウソつくの？」

「う、ウソじゃないよ。ほんとなの」

図書室にかえしてしまった真っ白な本を、オカピにも見せてやりたい。

「まったまたー」

どしん。

と、オカピは腰であたしの肩をおしてきた。

さすがオカピ。ぐいぐいとキヨリをつめてくる。

このコはわりと、クラスでも派手めのグループにいる。だからオカピの友だちは、あたしの友だちじゃない。

だけど保育園のころから、このコとはなぜか気があうんだ。

「ミサキ、図書準備室つてなにするとこか知ってるの？」

「えっ、知らないよそんなの」

そう言うと、オカピはイタズラを思いついた1年生のような顔になった。

「うっふふ」

「なにになに？」

ちよつとこわいんですけど。

「じつは、本ほんぎらいのコに、むりやり本ほんを読よませる部屋へやなんだよ！」

「やだー！」

あたしは両手りょうてで頭あたまをかかえた。

「出でてきたときには、ホンダイスキデス、つて別人べつじんみたいになつてるんだよ！」

「やだやだー！」

あたしはぶんぶんと頭あたまをふった。

そんなあたしを見て、オカピはおもしろそうにわらい声こゑをあげた。

「あつはは、ほんとミサキつて本ほんきらいだよね」

「うー、きらいだよ本ほんなんて」

「感想文かんそうぶんなんか、ちやちやつとテキトーに書かいちゃえばおこられなくてすむんだよ。なんでそんなにヤなの？」

「なんでつて……」

本ほんがきらいな理由りゆうなんか、いくらでも思おもいつく。

まず、文字ばっかりなところ。

学校の勉強でつかれているのに、さらに頭つかうなんて信じられない。文字ばかりの本を読むと、なんだか勉強していないのに勉強している気持ちになつてきてしまう。

あと、わけのわからないお話が多いところ。

教科書にのつてた『走れメロス』のメロスはいきなりぶちギレするし、『ごんぎつね』のごんはかわいそうすぎる。マンガだったら、新人賞の佳作にもならないよ。

それから、あたしのママが変わつちやつたのも、本が原因で……。

「あ、変なこと聞いてごめん」

オカピがあわてたように言った。

きつとあたし、暗い顔してたんだらう。

オカピは、あたしの家の事情を知っている。

「ううん。ちよつと書くのがめんどくさかつただけ」

「まっ、どうしても書けなかったらネットからコピつてくればいいんだよ」

「オカピ……それいちばんおこられるパターンだよね」

「バレたか」

そう言つて、へへつ、とオカピはわらつた。

そのわらい顔は、すがすがしくて、あたしはそんなオカピを見るとなんだか安心するんだ。

そのとき教室のうしろのほうから、「オカピ」と声がかかった。

いつもオカピと一緒にいるコたちだ。「行こうぜ」と言いながら、腕をぐるぐるふりまわしたりしている。ギャルっぽいコと男子は、ちよつと似ていると思う。

「じゃな。まけんなよつ」

そう言つてオカピは、あたしの頭をくしゃくしゃとなでると、友だちと合流して教室から出ていった。

あたしはひとり、ぽつんととりのこされた。

オカピの言うとおり、ちやちやつとかたづけたほうがいいのかもしれない。

あたしはいつもよりずっと重く感じるランドセルをせおつて、教室を出た。

2話

あやかし図書委員会へようこそ！

からから。

と、音をたてて図書室のドアをあけると、紙つぼいにおいがした。

まんなかのスペースには低学年むけの本を並べたひくい本棚と、大きなテーブルがあつて、本を読んだりしている低学年のこたちが目にはいった。

すぐ右のカベぎわには、本をかりるカウンターがある。

そしてカウンターの奥には、図書準備室と書かれたドアがあつた。

そのドアには小窓がついているけど、白い紙が貼られていて、なかが見えないようになってい

る。

なんで？

カウンターには、エプロンをかけた女子と男子がひとりずついた。あたしはちかくにいる、髪をお団子にまとめた女子のほうに話しかけた。

「あのお」

「はい？」

「……その図書準備室つて、なにするとところですか？」

これは、聞いておかなきゃいけない大切なことだ。

「本の整理をするところ、かな。あたらしくはいつた本にバーコードやフィルムを貼ってパソコンに登録したり、やぶれた本をなおしたり、あとは図書館だよりとかもつくってるんだよ」

「へえ」

「あなたひよつとしてミサキちゃん？」

「えっ、なんで知ってる……」

言いおわらないうちに、お団子女子が、がしつとあたしの手をつかんだ。

「リクトくんたち、まってるよ。さあさ、はやくはいつて」

「えっ、なにになに!？」

どういうこと!？」

お団子女子が、ぐいぐいと手を引っばってくる。

そしてお団子女子は図書準備室のドアをあけて、いきなり背中をおして、あたしをなかにほうりこんだのだった。

こんなの、聞いてない！

オカピの言つてたことは本当だったの……!?

あたしはこわくなつて、ぎゅつと目をつぶった。

「ばんぱかばーん」

だれかとだれかの声がかさなつて、聞こえた。

うつすらと目をあげると、虹みいたくさんの色が、ひらひらしているのが見えた。

紙吹雪だ。

だれかが、オリガミで紙吹雪をつくつたんだ。

「ようこそ、あやかし図書委員会へ」

目の前にいる、ふわふわしたマツシユヘアのイケメン男子が、にこやかに言った。

「あ、あやかし？」

あたしはきよんとんとして、首をかしげた。

ひらひらと、頭にのつていたらしいオリガミが落ちていった。

図書準備室は、なんてことないただの部屋だった。まんやかにテーブルがあつて、パソコンと

書類とコンビニ袋がおいてある。

「そう。ぼくは図書委員長のササモトリクト。よろしくね」

「え、あ、うん」

なんなんだこれは。

目の前のイケメン男子は、ひとなつつこくわらってくれたけど、展開についていけないぞ。

「あれ？ ひとり？」

あたしはきよろきよろと、部屋を見まわした。

もうひとり、女子の声があったように思ったんだけど……。

「うえ」

聞きおぼえのあるような声が出て、あたしは天井を見あげた。

そこには、

……天井に正座している、着物すがたの女子がいた。

「でえええつ!？」

あたしはさけび声をあげて、うしろにさがった。

なんでさつきの着物女子が、天井でさかさになってるの!？」

「うるさい」

着物女子はふよふよと飛びながらおりてきて

(一)、あたしにひとさし指をつきつけた。

「図書室では、しずかに」

「あつ、はい」

そう言われたら、はいつて言うしかないんだ

けど！

着物女子は、あたふたしているあたしをじろ

じろ見て、「ふうん」とつぶやいた。

「ねえリクト。ほんとにこのコなの？」

なにがだろう。そんなに見ないでほしい。

「ほんとだって。仲よくしなきゃだめだよ、ほら」

と、リクトっていう男子が、着物女子の背中をそつとおした。

着物女子は、しぶしぶといった感じで、あたしにむかって手をさしだした。

「あたし座敷童のシノ。よろしく」



「よよよ、よろしく。よ、妖怪さんなの？」

まだパニックがつづいているあたしは、ふるえる手で握手しようとした。けれど、シノつていう着物女子は、さつと手を引っこめちやつた。

あれ？

そしてふいつとむこうをむいて、ふよふよと飛んでいってしまった。

そのまま空中で半回転して、あたしに背をむけたまま天井に正座してしまう。なんで？

「あー、ごめんね」

リクトくんが、頭をかきながら言った。

「シノのやつ、人間に妖怪って言われるのがイヤみたいでさ」

「そ、そうなんだ。ごめんねシノ、ちゃん」

あたしはうえを見あげてあやまった。

でもシノちゃんは、こつちを見てくれなかった。

「あたし妖怪に妖怪って言われるのはいいけど、人間に妖怪って言われるの超きらい」
超、とか言うんだ座敷童も。

「じゃ、じゃあなんて言えばいいの？」

シノちゃんは、すこしだけこつちをふりむいた。

ショートボブの髪から、ちらりと鼻が見える。さかさになつてるのに髪はそのまま、重力なにかあのコには関係ないみたい。

「……あやかし」

シノちゃんがぼつりとつぶやいた。

「あやかし？」

「そう。この図書室は、ほとんどあやかしが運営しているんだよ」

リクトくんは、コンビニ袋からペットボトルのお茶をとりだした。

「まじですか」

「まあお茶でも飲みながら、そのあたりを説明させてよ。ヒナタ先生ももうすぐ来るからさ」

「ヒナタ先生？」

「司書の先生。ほらシノもおいで。ぼたぼた焼あるから」

そう言つてリクトくんは、コンビニ袋からおせんべいのパックもとりだした。

シノちゃんは、しぶしぶといった感じでおりにきた。

リクトくんにはイスをすすめられて、あたしもテーブルにつくと、
ぎろり。

とするどい目で、シノちゃんがあたしをにらんでくる。

にらむ、って言いすぎかな。でもシノちゃんの切れ長の目は、ちよつとこわい。

あたしはなにか言わなくちゃと思つて、「ぼ、ぼたぼた焼好きなの？」と聞いてみた。
こくり。

とシノちゃんがうなずいた。なぜかほんのりほつぺたを赤くして。

……変わったコ！

それから陸人くん（つていう漢字らしい）が、いろんなことを説明してくれた。

うちの学校の図書室は、妖怪……じゃなくて、あやかしが運営してるんだつて！

6年生の陸人くんは人間だけど、座敷童の志乃ちゃんのほかに、猫又や九尾つていうあやか
しがいるみたい。

「なにげに和風なんだね」

あたしはお茶のはいったコップを両手でもつて、思つたままの感想を言った。

「私立のミツシヨンスクールには、吸血鬼とかいるけどね」

陸人くんは、まじめな顔ですごいことを言った。

志乃ちゃんは、ぼたぼた焼をぼくついでる。

なんだかいまだに信じられないな。

陸人くんは、ふうつとため息をついて、ちよつと暗い顔になった。

「でも実は、あやかしのなかには、わるいあやかしもいるんだよ」

「わるいあやかし？」

「そう。物語を食べて、白紙にしてしまうあやかしなんだ」

「えっ！」

それってひよつとして……。

「あたしのかりた本、途中から文字が消えてたの。あれってあやかしのしわざだったの？」

あたしがそう言うのと、陸人くんは真剣な顔でうなずいた。

「そう。シミっていうあやかしが、食べてしまったんだ」

「シミ？」

「紙に魚って書いて、紙魚と読む、古いあやかしだよ」

「やつぱり夢とかじゃなかったんだ」

あたしはなんだか、ほっとした気持ちになった。

「靈感がつよいひとの本は、とくにねらわれるからね。紙魚は物語を食べてしまうんだ。古代中国では、紙魚が歴史書を食べつくしてしまつて、どんな世の中だったのかまつたくわからなくなつた時代もあるんだよ」

「へえー」

「漢字とともに日本にやつてきた紙魚は、ずっと図書館の大敵だった。その紙魚から本を守つて

いるのが……」

陸人くんは、ひと呼吸おいて、それから胸をはって言った。

「あやかし図書委員なんだ」

「なんだ」

と、志乃ちゃんも言った。

へえー、と感心しているあたしに、陸人くんはつづけて聞き捨てならないことを言った。

「これからよろしくね羊崎さん。一緒に本を守つていこう」

完全に、「ん？」という顔のまま、あたしは固まつた。

「ねえ陸人。このコ固まつてるけど大丈夫？」

「大丈夫だよ。羊崎さんはすごい靈感つよいんだよ」

「あんまり本とか読まなそう……」

「本がぎらいな図書委員なんていないさ」

かつてに話をすすめている志乃ちゃんと陸人くんに、あたしはつい大声でさげんでしまった。

「……あたしが図書委員なんか、なるわけないじゃん！」

そんなあたしを見て、ふたりは声をあわせて、

「図書室では、しずかに」

と注意した。

そう言われたら、はいつて言うしかないんだけど！

「……はい。いや、ちがうよ、なななな、なんであたし、感想文の書きかたをおしえてもらいに

来ただけなんですけど」

なんだかもう、頭がこんがらがってきたぞ。

「感想文の書きかたならおしえてあげるよ」

「いやそうじゃなくて」

話がちがう。

話がちがうっていうことは、サギだ。これはきつとなにかのインボード。だつたら、はやくにげなくつちや——。

「あたしいそがしいんで、もう帰らなきや」

びしつとそう言いきつて、あたしは足もとのランドセルを手にとつた。だけど、

「——まつのじゃ」

いきなり、ランドセルがしゃべつたんだ。

「ひよわつ」

もうなにおおきてもおどろかないと思つていたけど、それでもあたしはおどろいて、ランドセルから手をはなした。

ばたん、とランドセルがたおれて、ふたがひらいた。

「……ね、猫？」

「おぬしにしかできない仕事なのじゃ」

と言いながら、なかからでてきたのは、茶色い毛なみのふとつた猫だつた。

フキゲンそうな顔をしたしゃべる猫は、ひよ
いとテーブルにジャンプして、あたしの目の
前にすわった。

「な、なんで猫さんがしゃべってるの？」

「わしの名はココアじゃ。いにしえより語りつ
がれてきた伝説のあやかしののじゃ」

「……こ、ココア」

意外と、今つぽい名前なんだ。

ココアって猫には、なぜかしつぽがふたつあ
った。

ふたつのしつぽのさきには、ヒトダマみたい
な青い炎が、ゆらゆらとゆれている。

「いま、意外と今風な名前だと思つたじゃろ」

ココアはきげんわるそうな目であたしをにらんだ。

「そ、そんなことないよ」



さつさと帰ろうと思つたあたしは、床にたおれているランドセルを手にとつた。そしてなかを見て、うんざりした。

「毛、毛が……」

教科書からペンケースまで、茶色い毛だらけになっていた。

「おぬしのランドセル、ちようどいいぐあいにスカスカで寝ごこちよかつたぞ」
あやまりもせず、ココアがそんなことを言つた。

「もう！」

あたしは、キレた。

「図書委員なんか知らないよ！ あたし本なんかきらいだもん！」

はつ、と口をおさえたときには、もうおそかつた。

陸人くと志乃ちゃんは、目をまんまるくしてあたしを見ていた。

ほつぺたが熱くなるのを感じた。

あたしはランドセルをすばやく右肩だけにかけて、そのまま図書準備室を飛びだした。カウンターにいたお団子女子が、なにごとかとあたしを見たけれど、かまうもんか。

あたしはダッシュで、5年生のゲタ箱までむかつたのだつた。

3話

ついてきた猫又と、不穩なカゲ

走つて走つて、校門のまえでぐるりとふりかえつた。

よし。おいかけてこない。

あたしはふうつと息をついて、そのままいつもの道を歩きはじめた。

今日はほんとうに、なんだつたんだらう。

いきなり着物女子があらわれたと思つたら、イケメン男子に猫又まで出てきて、あたしに図書委員になれつて言うんだから。

けつきよく、司書の先生にも会わずに帰つてきちやった。

明日、青山先生になんて言いわけしよう。

でも青山先生は、けつこうテキトーなところがあつて、図工の時間とかにちよつとサボつてい
るコがいてもあまり気にしない。

だから読書感想文のことも、明日になればわすれてる可能性にかけてみようかな。

あたしはそんなことを思いながら、とぼとぼと帰り道を歩いていった。

あたしの家は、なんでこんな色にしたのかよくわからない、緑色のマンションの一室だ。もう見なれてしまった緑の門をくぐり、エレベーターで3階へ。

あたしは家のカギをとりだして、そつとあけた。

玄関には、ママのパンプスとサンダルがそろえてある。

あたしはキッチンテーブルにおいてあった、「お仕事中 宅食のひとがきたらうけとつておいてね」という書きおきを見た。

今日もママは、仕事部屋で仕事中みたい。

あたしは手あらいうがいをしたあと、洗濯機のふたをあけて、あんのじょう干しわすれている洗濯物をカゴにうつした。

今からじゃあんまり乾かなそうだけど、ベランダに出て、ちやちやつと干した。

ベランダからは夕日が見えて、どこかから、カレーっぽいにおいがただよってきた。

ママは。

むかしはこんなふうじゃなかった。

ママの仕事は小説家で、でもなんとか島つていう賞をもらってから、ひとが変わっちゃったみ

たいになった。

たくさんのひとからほめられて、ほめられて、自分の子どもより本が好きになっちゃったんだ。

べつに、だから本がきらいつてわけじゃない。

もう5年生だし、ひとりでもできる。

あたしはリビングで、音をちいさくしてネットフリックスの番組を見て、それから宅食のお兄さんがとどけてくれた栄養満点のお弁当を食べた。

ぶっちゃけ、ママの料理より2倍おいしい。

ママと一緒に食べたなら、2かける2で、4倍おいしくなる気もするけど、ママの仕事が終わるのをまったらお腹空死にしちゃう。

そう思っごちそうさまして、自分の部屋にもどって、ランドセルのふたをあけたら、またあいつがはいっていた。

「ふぎやあ！」

あたしがベッドのうえでランドセルをさかさになると、ココアと教科書が、どさどさと落ちて

きた。

「ふぎやーじやないよ。なんで家までついてくるの」

「あやかし図書委員は人手不足なのじゃ」

「どうでもいいけど大きな声ださないで。ママが集中してお仕事してるんだから」

「ふん」

ココアはひよいつとベッドからジャンプして、あたしの机のうえにのつた。

「あやかしのすがたや声は、靈感のない人間には見えんし聞こえん」

「あー、ベッドが毛だらけ」

「ひとの話きけ」

ココアにかまわず、あたしはコロコロで、ベッドを掃除しはじめた。

コロコロにひつついた毛は、だいぶリアルに見えるんですけど。

「……陸人や志乃も心配しておったぞ。どうして逃げるのじゃ」

「いや、そもそもあんたが原因でしょ……」

「ふむ」

ココアはあたしの机のうえで寝そべった。ふたつのしつぽと青い炎が、ゆらゆらとゆれてい

る。

「わかるかったのじゃ。じゃあ、なかなかおりの印にブラッシングをしてくれぬか」

「こいつ……」

あたしはだいたいぶムカついたけど、ぐつとこらえた。

そして机の引き出しの奥から猫用ブラシを出して、ココアをブラッシングしてあげることにした。

寝そべるココアの茶色い毛なみにそって、さっさとブラシをうごかしてゆく。

「はあ、極楽極楽」

「ほんとジジくさいんだね」

「わるいか。わしはいにしえより語りつがれし……」

「はいはい」

しつぽの先の青い炎にさわらないようにしながら、あたしはブラッシングをつづけていった。

「おぬし、なかなかうまいではないか」

「まあね」

「そこにかざってあるブサイクな猫の絵は、ひよつとしておぬしの猫か？」

ココアは、カベにかけてある絵をちらりと見た。

あたしが2年生のときに描いた、前足にしっぽをからめてすわっている黒猫の絵だ。

「ブサイクって……」

あんたが言うのか、と思ったけど、ぐつとのみこんだ。

「むかし描いた、絵」

あたしがそれだけ言うと、「そうか」とだけ言ってココアは目を閉じた。猫は、人間ほど長くは生きられない。

「……ねえ」

あたしが話しかけると、「ん？」とココアは片目をあけた。

「モカは……あたしのうちにいた猫は、あやかしになったのかな？」

「すべての猫は天国へ行く。あやかしになるのは、長く生きすぎた猫だけじゃ」

「そっか」

「うむ」

あたしたちはそれきりだまった。

机のうえの、とれた毛をあつめた毛玉が、こんもりとおおきくなっていった。

「おしまい」

そう言つて、あたしはココアの首をなでた。

翌日になつても、青山先生は、読書感想文のことをすっかりおぼえていた。

朝のホームルームで、

「そういえば羊崎。お前、ちゃんと感想文の書きかたおしえてもらったのか？」

と、先生はなにも知らなそうな顔で聞いてきた。

「えつと、図書委員のコにいろいろおしえてもらいました」

ウソはついていない。

ちよつと気がひけるけど、ありのまま話したつて、どうせ信じてくれないんだから。

「よかつたな。早く提出しろよ、間にあつたら校内コンクールに出せるからな」

はい、とあたしはひとこと返事した。

さつさとこの話おわらせてほしい。

「おれも小学生のころは本に夢中だつたな。十五少年漂流記とか、ロビンソン・クルーソー、宝島、海底2万マイル、大好きで何回も読んだなあ」

でも、なにかのスイッチがはいっちゃったのか、ジャージの自分語りがはじまった。

「スマッホとかテレビもいいけど、本、おもしろいぜ。図書館に行けばタダで読めるしな。読書感想文のためとかじゃなくても、みんな、学校がつまらんと思ったら本読もうな」

なんなんだスマッホって。

あたしはふたたび先生に話しかけられないように、ゆっくり下をむいた。

ぼとり。

と、なにかが机のうえに落ちてきた。

なんだこれ。あたしの頭につけていたんだらうか。

あたしはそれをつまんでみた。なにかの葉っぱかな。ぐるぐると指紋みたいな細かいもようがついていて、むこうがわが、ちよつと透けて見える。

やがてホームルームがおわって、一時間目の算数がはじまった。

だけど青山先生は、デカ定規をわすれたとか言っつて、職員室にとりに行ってしまった。

なんで読書感想文のことはわすれないのに、どうでもいいところだけわすれるんだらう。

あたしはふりむいて、

「ねえ島津さん」

と、あたしの席のうしろの、理科がとくいな島津さんに話しかけた。

「なあに？」

算数の教科書をひらいていた島津さんが、顔をあげた。

「あのさ、これってなにかわかる？」

あたしは指でつまんでいた葉っぱみたいなのを、島津さんに見せた。

だけど島津さんは、「？」という顔で、あたしの指をまじまじと見つめた。

「なにかもってるの？ よく見えないんだけど」

「え？」

あたしはとまどった。葉っぱサイズのこれが見えないなんて。

でも島津さんはウソつくようなコじやない。

ひよつとしたら……。

「ちよ、ちよつとまってるね」

「変な羊ちゃん」

あたしは算数のノートに、イラストを描くことにした。

さらさらと描いた丸っこい葉っぱみたいな絵を見て、島津さんはむずかしい顔をした。

「葉つば……にしては葉脈のかたちがちがうね」

「ちよつと半透明なの」

「ひよつとしたら、魚のウロコじゃない？」

「ウロコ？」

「そう。木の年輪みたいなものがあるでしょ。ある種類の魚は、一年生きるごとにウロコのもようがひとつずつふえていくの。エンリンっていうんだよ」

「へえ……」

あたしはそのエンリンとかいうもようをながめた。

イラストには簡単に描いたけど、そのエンリンはものすごく細かくきざまれている、グラデーシオンになっている。こんなに生きる魚って、いるんだろうか。

「……ありがとう」

あたしがうわのそらでお礼を言ったとき、先生が黒板でつかうデカイ定規をもって、教室にもどってきた。